

第二章 絶滅政策

*

ナチ体制の指導部はすでに一九三〇年代半ばから、ドイツ・ユダヤ人をどのように片付けるかについて考慮していた。指導部は次々と急進化していく方法によって彼らの出国を強要しようとしていたが、一方で彼らの財産も重要であった。事実、ドイツとオーストリアのユダヤ人のごく一部しか、他国へと出国する機会を見つけれなかった。

戦争が始まると、出国はほとんど絶望的となった。しかしドイツの征服政策によって、ドイツの支配地域にいるユダヤ人の数は一九四一年夏までに何倍にも膨れ上がり、三〇〇万人以上へと増加していた。一方ドイツの行政機関は、ドイツが支配するヨーロッパでの、

すべてのユダヤ人を含むかたちでの「ユダヤ人問題の解決」を模索し始めた。

ユダヤ人政策の急進化

ポーランドでは、ドイツによる反ユダヤ主義政策は、占領当初の数ヶ月間で急激に先鋭化し、組織的なものとなっている。まずは虐待と差別が行われ、次いで強制労働と大量移送、そしてゲットーへの収容が行われた。西部での勝利ののち、一九四〇年初夏にはフランスやベネルクス諸国でもユダヤ人迫害が始まる。迫害はどこでも似たようなかたちで、一九三三年以降ドイツで行われていった迫害のやり方に沿って行われた。

もっとも、「ドイツ国内での迫害が時間を追って徐々にエスカレートしていったものであるのに対し、」短期間で一気に行われた点が特徴的であった。ユダヤ人の存在がまず把握され、登録が行われ、続いてさまざまな差別や嫌がらせが次々となされ、社会的に孤立させられた。そのさい、外国籍のユダヤ人（そこにはドイツやオーストリアからの多くの難民も含まれていたが）は、西欧諸国での迫害でとくに苦しめられた。

なぜなら彼らは、すでに国籍を取得して久しい現地のユダヤ人と違って、それぞれの国の当局によってほとんど、もしくはまったく保護されなかったからである。と同時に、彼

われた。その間、当局は「ヨーロッパ経済圏」には五八〇万人のユダヤ人がいると見積もっていた。ドイツ指導部は、数ヶ月以内でソ連に勝利することを期待していたので、ユダヤ人は勝利ののちに総督府の東にあるプリピャチ湿地か、あるいは北極海沿いにあるソ連の秘密機関NKWD（内務人民委員部）の収容所に移住させられるという案が通った。

現地の厳しい生活条件ゆえに、ほとんどのユダヤ人が短期間で死ぬことは、疑いの余地がなかった。ソ連にたいする勝利の時を待てばよいのであって、ユダヤ人の身に何が起るかという問題は、それで解決するだろうというのが、彼らの考え方だったのだ。ユダヤ人の総督府への移送は中止された。

ソ連に進撃した最初の数日間の段階で、すでに保安警察の行動部隊と武装親衛隊は、しばしば国防軍部隊と現地のナシヨナリストたちの支援をうけて、ユダヤ人男性および共産党幹部数千人を殺害し始めた。そのさい、ほとんどの場合でユダヤ人男性と共産党幹部の扱いに違いは見られなかった。

大量射殺が最初の頂点を迎えたのは、七月七日、ピアウイストクにおいてであり、ここではリユーベック出身のある警察大隊が三〇〇〇人のユダヤ人男性を殺害した。ここでは依然として、ユダヤ人とポリシエヴィズムが結びついているという思考が重視されていた。

ヒムラーが一九四一年七月末に東部戦線を訪問してから、ソ連における殺害計画の対象は拡大され、今や「女性と子ども」も殺害されるようになった。この殺戮の主たる根拠として強調されるようになったのは、もはや政治的な理由だけではなく、食糧不足や労働可能性であった。「無駄飯食い」に長期間食糧が与えられるべきではなく、労働不能者を無理やり引きずって連れていくべきでもなかった。今やその地域全体のユダヤ人が、具体的な根拠があるうとなかろうと完全に殺害されるようになったのであり、そのような事態は初めてのことであったのだ。

同盟国であるハンガリーの部隊が、北部ハンガリーのユダヤ人をドイツが占領しているウクライナへと追放し始めると、多くの親衛隊・警察部隊が国境の地カメネツィポドルスク（カームヤネツィポゾーリシクイイ）にやってきて、八月末には三日間で二万三六〇〇人のユダヤ人を射殺した。ここではすでに、選択的な殺害政策から組織的な大量殺戮への移行が完全に生じている。

ウクライナの首都キエフでは、撤退する赤軍が残していった多くの爆弾が九月末に爆発した。それによって街の大部分が炎に包まれ、多くのドイツ兵が殺された。いつものように、ウクライナ住民のうち、ドイツに協力する用意がある人びとは、ユダヤ人にこの攻撃

の責任があるとした。

それにたいして第六軍の司令官は、大規模な「報復措置」を開始する。この街に住むすべてのユダヤ人が、九月二九日の朝、街のある広場に出頭させられた。その後彼らは、街の外れにあるバビ・ヤールという名の峡谷へ連れていかれた。そこで、彼らは服を脱ぐことを強いられ、集団で峡谷のふちに整列させられ、特別部隊（ゾンダーコマンド）の隊員によって射殺された。一九四一年九月二九日と三〇日の二日間で、三万三七七一人のユダヤ人がこのようにして殺害されている。

行動部隊、武装親衛隊、警察そして国防軍部隊は、一九四一年六月から四二年三月のあいだにソ連占領地域で、あわせて六〇万人以上のユダヤ人を射殺した。ここで観察される野蛮化、荒廃、自制心喪失のプロセスは、対ソ戦開戦以降高まっていった時間的圧力と、軍事的な失敗によって加速していったものだ。だが、ここではそれに加えて、補給がうまくいっていないことが、ソ連の抵抗によって脅威を受けていたこと、そしてユダヤ人と共産主義者を同一視したことが重要な役割を果たしていた。

だからこそ、徹底的に容赦ない姿勢で臨み、より苛烈な措置を講じ、あらゆる抑制や手加減も、いままですぐ慣れ親しんできた態度もすべてをかなぐり捨てること、この脅威にたい

して主導権を握ることができるといふ確信が、ますます強まっていった。こうした考え方は殺戮部隊にとつて、自分たちの行為を正当化する防護用シールドとして機能した。ソ連との戦争が始まってから数ヶ月間のあいだに、このような行為はすでに行われていたのだが、数ヶ月たった後であっても、こうした正当化のためのシールドはまだ必要とされたのだ。

しかし、まもなく予期されるソ連への勝利ののち、すべてのユダヤ人はソ連へと移送され、現地でおそらくは強制労働者として利用されるのだという原則は、依然として生きていた。それはまず、ポーランドのユダヤ人にあてはまった。しかも、総督のフランクは今やヒトラーから、総督府はユダヤ人の単なる通過収容所であり、恒常的な滞在地として機能することはないとこの明確なお墨付きすら得ていたのである。

だがそれは、ドイツ本国のユダヤ人にもあてはまった。一九四一年九月中旬、ヒトラーは当初の予定とは異なり、ドイツ本国のユダヤ人（彼らは九月一日以降、衣服に黄色い星を着用することとされた）は戦争が終わってから東部に移送されるのではなく、直ちに移送されるといふ決断を下した。

しかし、遅くとも一九四一年一〇月中旬になると、赤軍にたいするドイツの急速な勝利はもはや計算できないことが明白になっていった。ロシアの北極海沿岸にある収容所は、もはや言及されることもなくなつた。ポーランド系ユダヤ人、あるいは全ヨーロッパ・ユダヤ人の北部ロシアへの移住という、それまで視野に入っていた計画は、もはや現実的なものではなくなつたということだ。

その結果、ポーランドでもはじめての大量処刑が行われた。スタニスラウという、ハンガリー国境にほど近い東ガリツィアのある町は、一九四一年までソ連領となつていたが、ここに一〇月、ゲッターが設置されることとなつていった。だが、この街に居住するユダヤ人の規模と比べると、ゲッター予定地となつていた街区はあまりにも小さいように思われた。そこで現地ドイツの責任者たちは、ユダヤ人の数を射殺行動によって減らすことを決断した。一九四一年一〇月六日と一二日、街の外れでおよそ一万一〇〇〇人のユダヤ人が射殺された。

一九四一年一〇月から一一月にかけての数週間のあいだに、行動部隊、武装親衛隊、通常警察は、数十万人のソ連およびポーランドのユダヤ人を射殺した。同じ時期に、同様に数十万人のソ連捕虜が、国防軍の基幹収容所や通過収容所で亡くなつていく。レニングラ

ードや東部のほかの多くの地域では民間人が餓死し、同様に数十万人の犠牲者を出した。総督府やヴァルテガウでは、ゲッターの死者数は週ごとに増えていった。

一九四一年六月から一二月までのあいだに、ポーランドとソ連ではあわせて一五〇万人以上の人がドイツの部隊によって、戦闘行動以外のところで殺害されるか、あるいは餓死している。

ジェノサイドの決定

このような状況にくわえて、ドイツ指導部にとつてとりわけ重要だつたのは、東部戦線での損害の急速な増加であつた。そうした状況が目の前にある以上、ドイツの支配地域にいるユダヤ人を、かつて想定されていたようにシベリアへと連行して、そこで彼らが死ぬのを待つのではなく、その場でただちに彼らを殺してしまつても、ドイツ指導部にとつては、もはや重大な問題ではなかつたのだ。ただ、ソ連で行われていたような大量射殺は、ドイツの支配地域にいるユダヤ人の数の多さを考慮すれば適切なやり方とは言えなかつた。こうした手法は、殺害部隊のメンバーたちの深刻な精神的負担となつていくという批判の声が、ますます強くなつていったからだ。

そのためドイツ指導部では、ドイツ国内で障礙者殺害のために使われていた別の手法を用いることが決定された。一月初頭には、短時間で多くの人間を殺害することができる、常設の絶滅施設の建設が始まった。最初の絶滅施設は、ルブリン近郊のベウジエツに建設され、そこにT4作戦の専門家たちがやってきた。彼らは「安楽死」計画の中止後、「東部出動」のためにやってきたのだ。さらなる絶滅施設がウーチ近郊のヘウムノ（クルムホフ）につくられた。この二か所でユダヤ人は、T4作戦の手法、つまりガスによって殺されることになっていった。

ヒトラーや現地の責任者たちによる個々の申し合わせや決定は、厳格な機密保持のもと行われていた。だが、ヒトラー自身がこの件について、この時期に何度も詳しく述べている。一〇月二五日、彼はハイドリヒとヒムラーに、次のように言った。

「この犯罪者の人種（ユダヤ人をさす）は、『第一次』世界大戦では二〇〇万人（ドイツ人軍人）の死に責任があつた。今度（第二次世界大戦）はふたたび、数十万人の死に責任がある。我々は彼らを沼沢地へと送り込むことはできない、などと誰も私に言つてはならない。それならいったい誰が我々の国民の心配をするのだ？ 我々がユダヤ人を根絶するという恐怖が先立つのはよいことだ」。

そしてナチ党のイデオログであるアルフレート・ローゼンベルクは、一九四一年一月一日、ジャーナリストを前にした演説で、こう述べている。

「東部ではまだ約六〇〇万人のユダヤ人が生きており、この問題はヨーロッパにおける全ユダヤ人の生物学的な除去によつてのみ解決される」。

二月二日、アメリカが参戦した翌日に、ヒトラーはナチ党の全国指導者や大管区指導者たちを前に次のように語っているが、ゲッベルスも書き留めているように、その趣旨はいつになく明確なものであつた。

「ユダヤ人問題に関して総統は、ユダヤ人問題を片付けることを決断した。彼はユダヤ人にたいして、もし彼らが再び世界大戦を引き起こすことがあれば、彼らはそのさいみずから絶滅を体験することになるだろうと予告した。これは空言ではない。世界大戦は起こつたのであり、ユダヤ人の絶滅は、必然的な帰結でなければならぬ。この問題については、あらゆる情緒とは無縁に考えなければならない。我々はそのさいユダヤ人に同情するのではなく、ただ我々のドイツ民族に同情しなければならない。もしドイツ民族が今ふたたび東部の戦場で一六万人の犠牲を払つたのであれば、この血まみれの紛争を引き起こした張本人は、みずからの命をもつてそれを贖わなければならない」。

ヒトラーのこの演説と、そこから引き出される結論について、ハンス・フランクはベルリンから戻つたあと、クラクフでみずからの総督府政府の官僚たちへ次のように報告している。

「だが、ユダヤ人はこれからどうなるんだろうね。彼らがオストラント⁽¹⁾の移住用の村落に収容されると、みなさんは思うかい？ ベルリンでは我々はこう言われたんだよ。なぜ君たちは、こんな面倒ごとで私たちを煩わせるのかね、彼らはオストラントでも帝国弁務官領でも我々の手に負えないのだし、君たち自身で彼らを粛正したまえ！」と。ユダヤ人は我々にとつてもすさまじく有害な大食漢だ。この三五〇万人のユダヤ人を我々は射殺することはできないし、彼らを毒殺することもできないが、なんらかのかたちで絶滅の成功につながるような措置を講ずることはできそうだな。しかも、本国の側で検討される措置との関連⁽²⁾で」。

ヴァンゼー会議

ユダヤ人の命運について決定的な決断がなされた時期は、一九四一年一〇月末から一一月末までのあいだだと断言できる。この時期の終わり頃にあたる一一月二九日、保安警察

と保安部が所属していた国家保安本部の「ユダヤ人問題」担当官はハイドリヒの命令を受けて、この問題に関与していたすべての国家当局に、一一月九日に調整のための会議を開くことを通知した。この会議はアメリカの参戦のため六週間延期され、一九四二年一月二〇日にベルリンのヴァンゼー湖畔の邸宅で開催された。

その目的は、主に三つあった。一つは、参加した関係機関に以下のような新方針を説明し、そのために必要となる措置について調整する必要があった。つまり、ポーランドおよび西欧のユダヤ人は戦後ではなく、直ちに移送を開始すること、しかもその目的地は北部ロシアではなく、総督府に新たに造られた絶滅施設であること。第二に、この件は国家保安本部が指揮監督を行うことについて、ほかの国家当局に確認する意図があった。そして第三に、すでに長いあいだ議論されてきた「二分の一ユダヤ人」や、いわゆる混合婚として生活しているドイツ・ユダヤ人の問題も、会議で明確にすることとされた。

この構想では、ユダヤ人を労働動員の対象とすることが重要な役割を果たしていた。会議の議事録には、次のようにある。

「管轄する機関による管理運営のもと、今や最終解決の実施でユダヤ人は、適切な方法によって東部で労働動員に投入されることとなる。労働可能なユダヤ人は、大規模な労働部

隊に編成されて、男女ごとにこの地域で道路建設工事に動員される。そのさい、その大部分は間違いなく自然減少によつて脱落することになる。場合によつては最後まで残るかもしれない部分〔ユダヤ人〕には、この場合間違いなくもつとも抵抗力のある部分なのであるから、適切な処置がなされなければならない。この部分は、自然による淘汰たうたを経て〔生き延びて〕きたのであり、これを野放しにすれば、新たなユダヤ人社会建設の出発点となるものと見なされるからである⁽¹⁰⁾。

要するに、「労働動員」は殺戮を偽装するための概念ではなかった。事実、労働可能なユダヤ人を強制労働させる計画は存在した。だが、そのなかでもつとも体力のあるユダヤ人が辛勞を耐え抜いた場合には、同様に殺害されることとなつていたので。つまり労働動員は、死へのう回路に過ぎなかった。

ソ連占領地域で行動部隊がユダヤ人の大量射殺を続ける一方、ほかのすべての占領地域では、ドイツ当局がユダヤ人の移送準備を進めており、ポーランドでは、さらなる絶滅施設が建設されていた。ドイツ本国とベーメン・メーレン保護領では、すでに一九四一年一〇月、ヒトラーが最初の移送命令を出している。本国とプラハからの一万九〇〇〇人のユダヤ人はその命令に基づいてウーチへと送られ、一月八日にはミンスクへの初めての移送が行われた。

ドイツ・ユダヤ人を収容する空間を作るため、すでに現地にはいたベラルーシ・ユダヤ人は射殺された。数週間のち、ドイツ・ユダヤ人は到着後、もはやどこかに収容されることなく、その場で殺害された。それがたとえば、一月二九日にリトアニアのカウナス、その翌日にラトヴィアのリガで起こったことだった。

ポーランドでは、総督府当局が一九四二年三月中旬には、最初のゲットー解体を始めていた。そのため、現地で暮らしているユダヤ人の登録システムが開発されている。彼らは「戦争遂行に重要」、「労働可能」、「労働不能」という基準で区別された。「労働不能」と判定された人びとは、貨物車で最寄りの絶滅施設（ベウジェツ、ソビボル、トレブリンカ）へと送られ、そこで殺害された。

一九四二年三月中旬から七月中旬までの移送第一波では、約二万人のユダヤ人が犠牲となった。一九四二年七月一九日には、年末までにすべての総督府に住むユダヤ人を殺害せよ、というヒムラーの命令が下る⁽¹¹⁾。これに基づいて、あらゆるポーランド・ユダヤ人の組織的殺害が始まった。三〇〇万人以上いたポーランド・ユダヤ人のうち、終戦まで生き延びたものは一〇万人に満たない。

アウシュヴィッツ

西欧諸国のユダヤ人は、一九四二年初頭以降、つぎつぎと通過収容所へと送られ、そこで彼らは東部への移送を待たなければならなかった。一九四二年六月二二日、パリ近郊の通過収容所ドランシーから最初の列車が、一九四二年六月二五日にはさらなる列車が東部に向けて出発した。オランダでは最初の列車が、一九四二年七月一日、ヴェステルボルク収容所を出発した。ベルギーでは一九四二年八月四日、最初の移送がメヘレンから東部、正確にはアウシュヴィッツへと行われている。アウシュヴィッツは東部オーバーシュレージエンの都市で、強制収容所に絶滅施設が附設されていた。

この地へ向けて移送されたユダヤ人のほとんどは、中欧・西欧出身であった。すでに一九四二年初頭、東部オーバーシュレージエンとスロヴァキアからの最初の移送が、ここに到着している。夏にはドイツとオーストリア、さらには西欧諸国、ルーマニア、ノルウェー、クロアチアからの移送が始まった。のちには、ブルガリア、ハンガリー、ギリシアからの移送もこれに加わっている。

降車場に降り立つやいなや、到着したユダヤ人は労働可能かどうかを判定された。労働

可能と判断された者はその後収容所へと送られ、強制労働させられた。だが多く（ほとんどの女性、老人全員、子ども全員）はただちにガス室へと送られ、そこで殺されたのだ。一九四三年末までに、ここで約八四万人のユダヤ人が殺害された。

しかし、ナチによる絶滅政策の犠牲となった人びとのなかで、ユダヤ人は最大の犠牲者集団ではあったが、唯一の犠牲者集団だったわけではない。そのさい、シンティ・ロマの運命は、ユダヤ人のそれに多くの点で類似していた。対ソ戦開始後、国防軍部隊と行動部隊は発見した「ジプシー」を多数殺害した。

一九四二年一月六日、ヒムラーは最終的に、すべてのシンティ・ロマをアウシュヴィッツ・ビルケナウ強制収容所に移送しよう命じた。⁽¹⁾ ここには、独自の「ジプシー収容所」が設置された。一九四四年夏に「ジプシー収容所」が閉鎖されるまでのあいだ、二二万二六〇〇人の収容者のうち一万九三〇〇人が亡くなった。ソ連と総督府でドイツ部隊によって射殺された「ジプシー」は、強制収容所で亡くなった人びとよりもおそらく多い。一九四五年までにドイツの支配地域で、少なくとも二〇万人のシンティ・ロマが暴力的にその命を奪われた。

一九四四年初頭、ユダヤ人の大規模な共同体のなかで、まだ大多数が無傷のまま残され

ていたのはハンガリーだけであつた。「一九四三年に」枢軸から離脱したイタリアのように、ハンガリーがドイツとの同盟から離脱するのを防ぐため、一九四四年三月一九日、ドイツ軍部隊がハンガリーに侵攻し、同時に国家保安本部「ユダヤ人課」の課長アドルフ・アイヒマンは、職員たちとともにユダヤ人の移送準備を開始する。二ヶ月後の一九四四年五月一四日、最初の列車がアウシュヴィッツに向けて出発した。後の数週間は、毎日およそ一万二〇〇〇人のユダヤ人が当地へと移送され、七月中旬までにはあわせて四三万八〇〇〇人が移送された。そのうち三二万人は、到着後ただちにガスで殺された。

戦争中、暴力的に命を奪われたユダヤ人は、合計すると約五七〇万人に達する。第二次世界大戦中のドイツによる絶滅政策の全体像を、正確に見通すことは依然として不可能である。

五七〇万人のユダヤ人に加え、約二〇万人のシンティ・ロマ、少なくとも一〇〇万人に及ぶ非ユダヤ系のポーランド人民間人、約二八〇万人のソ連兵捕虜、約三〇〇万ないし四〇〇万人のソ連民間人、そして約五〇〇万人のドイツ占領地域およびドイツ本国における、それ以外の非ユダヤ系民間人が犠牲となった。つまり、合計すると、およそ一二〇〇万ないし一四〇〇万人の民間人が、戦闘行動以外でドイツの支配地域で命を落としたことになる。

なる。

【第二章 註】

- (1) Heydrich an Ribbentrop, 24.5.1940, PAA Inl. II g 177.
- (2) Helmuth Krausnick: Denkschrift Himmlers über die Behandlung der Fremdvölkischen im Osten, in: VfZ 5 (1957), S. 194-198.
- (3) Funkspruch SS-Kavallerie Regiment 2, 1.8.1941. 以下に引用されている。Johannes Hürter: Hitlers Heerführer. Die deutschen Oberbefehlshaber im Krieg gegen die Sowjetunion 1941/42, München 2007, S. 558.
- (4) Hitler am 25.10.1941, in: ADAP, Serie D, Bd. XIII, Anhang II, S. 835-837. [ヤマン・カーンマン前掲書(下巻)「五一七頁を参考にした」]
- (5) Rede von Reichsminister Rosenberg anlässlich des Presseempfangs am Dienstag, 18. November 1941, 15.30 Uhr, im Sitzungssaal des Reichsministeriums für die besetzten Ostgebiete (Entwurf, vertraulich); PAAA, R 105192 DIX 472.
- (6) Joseph Goebbels: Eintrag vom 13.12.1941, in: ders., Die Tagebücher von Joseph Goebbels, hg. v. Elke Fröhlich, 32 Bde., München 1993-2008, Teil II, Bd. 2, S. 498 f.
- (7) [訳註]現在のバルト三国および、ポーランド、ベラルーシの一部を含む地域。ソ連占領地域の

うち民政地域は東部占領地域省が支配しており、オストラント、ウクライナの帝国弁務官領に分かれていた。

(8) Rede Franks, 16.12.1941, in: Frank, Diensttagebuch, S. 457 f. (ハインリヒ・アウグスト・ヴィンクラ、後藤俊明ほか訳「自由と統一の長い道II—ドイツ近現代史1933-1990年」、昭和堂、二〇〇八年、九二頁を参考にした)。文中の省略は明記していない。

(9) [訳註] 祖父母四人のうち二人がユダヤ教徒である人を名す。

(10) Protokoll der Wannseekonferenz. 以下などに載っている。Mark Roseman: Die Wannsee-Konferenz. Wie die NS-Bürokratie den Holocaust organisierte, Berlin, München 2002, S. 170-184. [ザンゼー会議記念館編著、山根徹也・清水雅大訳「資料を見て考えるホロコーストの歴史—ヴァンゼー会議とナチス・ドイツのユダヤ人絶滅政策」、春風社、二〇一五年、一五〇—一五三頁を参考にした]

(11) Himmler am 19.7.1942, VII, Bd. 9, Dok. 96.

(12) Bericht d. RfSS v. 16.12.1942. 以下に引用された。Michael Zimmermann: Rassenutopie und Genozid. Die nationalsozialistische (Lösung der Zigeunerfrage), Hamburg 1996, S. 301.

第三章 戦争と占領

*

一九四二年三月、国防軍は東部戦線で第二の攻勢を開始した。その目標はウクライナ、ヴォルガ川沿いの軍需工業の中心地であるスターリングラード、そしてコーカサスの油田地帯である。この作戦で、軍事指導部はまたしても大きなリスクを背負うことになった。というのも、国防軍にはほとんど予備戦力がなく、この規模の第三次攻勢をかけられる状況にはもはやなかったからだ。それでも、ドイツ軍部隊は一九四二年八月末までに南方で一〇〇〇キロ以上進撃し、ロストフと黒海東岸地域を占領することに成功した。一九四二年夏には、ドイツによる支配地域はその最大版図に達した。

第三帝国

ある独裁の歴史

ウルリヒ・ヘルベルト

小野寺拓也 訳

統治の全貌が明らかに。

ヒトラーは
東欧をいかに
改造したか？



世界最高峰、最新研究に基づく入門書、

ついに邦訳!

角川新書

定価：本体1,000円(税別)